

鹿兒島県の 村落共同体に就て

(鹿兒島) 大山彦一

一、共同体という概念に就ては、鴨子でも長時間にわたつての議論の主題であつた。不用意にこの概念は用いない方が賢明であるが、敢て批判を覚悟で、『鹿兒島県の村落共同体』の背後にあるものに就て述べたい。鹿兒島県の村落共同体の人間関係の最も基本的なものの一は親族関係の社会体系、即ち「シンヂ」である。「シンヂ」は所謂、同族團とは少しく異なる。我國現民法の規定する血族姻族を含めた、それを超える範圍の親族集團である。このシンヂは双系主義—*Matrilineal*

に近い—をもつて貫かれる。しかもそれは複系的—*Patrilithal*—と言いたい気がする—のかけを強くひいているところに特色がある。中国人の家族制度的表現にならへば、父族・母族・兩祖母族の、—*父骨母血の双翼をもつて—*支えられた親族体系である。「シンヂ」は狭義では、近來—近代化の前進とともに—所謂同族集團と同じ範圍で用いられるが、広義では「シンヂ・クンヂ」となるとし、双系主義—複系的—をもつて貫かれる広範圍にわたる親族關係を含め、後者が古來の用法である。鹿兒島県の村落共同体の背後には、かかる「シンヂ」—「シンヂ・クンヂ」—の双系主義—複系的—をもつて貫かれる親族關係の環で、結合された社会体系の圈があることを、知らねばならない。この圈は、今日シンヂ意

識の衰亡したる地域でも、社会的危機に臨めば、人々の意識面にのぼつて、重大なる考慮が払われる事實を見逃してはならない。この社会体系は被支配層たる庶民大衆のもつ血縁体系である。この社会体系は古代から伝承し続けたものであろう。封建時代に、島津政府は門割(カドワリ)なる制度で、この庶民層の社会体系に支配のワクを入れたが、この体系を徹底的には分割出来なかつたようである。これは庶民層の最後の防衛戦線—生命線であつたから。生産關係もこの社会關係と不可分であつた。

右のことは、鹿兒島県本土では、今日でも古い村落では隨處に実証出来る。近い機会にこの調査実例を報告したい。鹿兒島県離島では、奄美大島与論島等に、右の事の露頭が稍

を典型的に示される。この事はすでに公表した。

かかる人間関係の基礎構造の上に、かつては封建的機構―門割制等―が分割支配し、その後一明治以降―又近代的上部構造のワックが上から下へと、或場合には急激に打建てられた。近代化が徐々に、生産諸関係に人間関係に滲透をはじめているが、下部構造の停滞性の底には、右の人間関係の基礎構造が、根を張っている事実を見逃してはならない。

二私共は不思議な縁で鹿兒島県に生れ、鹿兒島県に住んでいる運命にあるので、右の事実がよく判る。現代、とりむすんでいる人間関係と、日常の見聞体験からして、又幼少年時代の追憶をたどると、右の事に連る諸行事が瞭によみがえる。カドという言葉すら幼少年時代に用いた。鹿兒島県の遅れた「停滞性」は私共に村落の諸古型を示してくれる。村の祭でもシニグの如き稲作豊年の古典的祭典が現存するし、それがパラデにつながっている如き。私がかつて「種子島のマキ」を追究したが、そして「東北地方のマキ」と比較してみたが、更に追究すれば、もつと面白い結果が出るに違いない。マキをシンデヤパラデとも比較追究している。これは全身的に、実地調査を精力的に敢行する事であると共に、理論的反省を伴うことが必要である。とりもなをさず、これは「コップ」の問題である。年はとつても、―いつのまにか、もう私は来年は還暦になつてしまつたが―勉強しなければ

いけない。この点になると、田舎にいると、ウオーミング・アップに乏しい。これは田舎に居ることの不便・不利益である。

「字間の 孤島初日の ありがたし」というわけである。

三年に一度の村研の大会は、この意味では田舎にいる者にとつては嬉しくも楽しい機会なのである。昨年の鳴子の様な会の持ち方は、一部には不満もあろうが、結構である。私共は日本社会学会には出席しなければならぬので、出来るならば、昨年同様、日本社会学会と連続して会が開かれることが望ましい。報告者に就て、思いつきではあるが、一言述べたい。今日では各府県に大学があり、其大学には村研の会員がおらるる筈である。各府県代表というわけではないが、其府県、其地方に就ては、最も「地元事情」に明るい訳であるから、それ等の会員に、順次其の地元の村落研究報告をしてもらつたら如何。昨年からは其の試みが行われ始めたと思うので、この方法は今後とも推進したい。希望を募り或いは指名する。この場合先輩の方々も遠慮せずにやつていただく事。斯様な個別報告の外に、共同テーマによる討論―昨年の「共同体」の如し―が行われることは勿論である。求められるままに、思いつくままを筆にのせたが、村研事務局はじめ各位の御健康を祈る。